みんなの広場

スピーカーズコーナー

FIGHT

編集委員が地域の皆さんにインタビュー！

今回は羽伏浦スケボーランプの設置やイベント運営をしてきた植松倫太郎さんにインタビューしました。

小久保：羽伏浦にランプを作ったきっかけは？

植松：もともとサーフィンをする波がない時に、個人宅のパークや室内のランプでスケボーをしていて、スケボーもサーフィンのように海のそばで、みんなで一緒に滑れたらいいなと思って、役場に駐輪場の使用許可をいただいて作り始めました。

小久保：ランプ制作の苦労話などはありますか？

植松：全くノウハウもないところから、詳しい人に設計図を見せてもらったりして作り始めました。サーファー中心に募金を行い、集まったお金で材料費だけを購入し、制作は仕事終わりにたくさんの人に支援してもらって、一から手作りしました。できあがったら、スケボーをやったことがない人も子供も大人もたくさん来て賑わいました。こういう遊び場をみんなが求めていた実感がありましたが、問題は老朽化で、5年ほどで作り直す必要があることですね。

植松倫太郎（うえまつりんたろう）さん
プロフィール
1974年、新島・本村出身
（株）新島工業所代表取締役
新島横乗倶楽部代表
NIIJIMA SURF×SKATE FESTIVAL代表

小久保：イベントも開催していましたね。

植松：ランプを作るのと同時に、スケボー仲間が集まる新島横乗倶楽部も発足しました。仲間たちとサーフィンの大会とスケボーの大会を一緒にやったらどうか？　ということになり、2017年から2019年にかけて新島サーフスケートフェスティバルを3回開催しましたが、選手が新島と湘南、東京など日本全国から参加するようになりました。2020年はコロナで中止になってしまったので、終息後にはまた開催したいです。

小久保：観光地としての新島、住民にとっての新島に今後はどのようなものが必要だと思いますか？

植松：僕らが子供の頃はサーファーのみならず、お客さんがたくさんいました。あの頃のようにするのは難しいと思いますが、観光客にとっても住民にとっても楽しめる、なおかつ新島にしかないような遊び場ができたらいいと思います。それはスケボーだけでなく、バレーボールやバスケットボール、ゲートボールやゴルフなど、新島のロケーションを楽しみながらできるアクティビティ施設が理想的ですね。そこからイベントも開催できたら、新島村も活気がつくと思います。

編集後記

正副委員長を中心に議会だよりも多くの皆さまに読んでいただきたく、原稿づくりをしています。コロナ感染症の影響でほとんどの行事が中止となり、島全体、閉塞感がただよっていますが、今号の「表紙は語る」のように、若い人たちがスケートボード場の制作、そしてサーファーたち中心の海岸清掃等、どれも頼もしく感じました。地球環境をよくする活動と自分たちの力で地域の活性化につなげる行動はすばらしく、無理せず続ける事を期待しています。

（前田寿夫）

広報編集委員会メンバー
委　員　長：小久保 利佳
副委員長：木村 諭史
委　　員：前田 泉
　　：前田 寿夫
　　：青沼 弘